

未来を見つめ 新たな時代を切り開く

今回ご紹介するのは、

日本仏教の価値観を見なおし、未来世代とともに今を生きる長期的思考を提案する僧侶、

震災をきっかけに伝統ある造り酒屋を継いだ元テレビ局記者、日本のソウルフードであるラーメンを武器に、アメリカで奮闘するラーメンヒーロー。

3人の卒業生に登場いただき、今に至るまでの道、そしてこれから思い描いていることを伺いました。

赤門繋がり僧侶の道へ

気がつけば僧侶になって20年です。私のような寺をもたない僧侶は、かつて「遊行聖」とも呼ばれていました。母方の祖父が住職をしていて、寺の孫としてお坊さんは身近な存在でしたが、いつか年を取りお坊さんの道を探求するのもいいのかなという思いがあった程度でした。僧侶として修行することになったのは、少なからず赤門繋がりです。実家がお寺だというクラスメイトが神谷町光明寺に下宿していて、時々彼の下宿先を訪ねるようになったことや、住職が東大出身だったこともあり、その縁で卒業後に光明寺に住み込み、修行を始めました。

経営を学びたかったため2010年にロータリー財団国際親善奨学生としてインドに渡りました。インド商科大学院はビジネスの第一線で経験を積んだ人が、世界中から集まっています。私はビジネスに親しんでこなかったからこそ、彼らと一緒に学び、この世界をどうとらえてどんな言葉で話しているのか、留学で得たものは大きかったと思います。

僧侶は先人たちの教を翻訳すること

仏教で語られる言葉は、シャバ的言語と遊離したところがありま

す。というのは僧侶の仕事は突き詰めて言えばブッダや親鸞といった先人たちの教を現代に翻訳することで、案外簡単なことではありません。

昨年出版した『グッド・アンセスター わたしたちは「よき祖先」になれるか』の翻訳も、まさに「アンセスター」を先祖と訳すか先祖と訳すかが重要でした。

そもそも日本仏教は先祖との関わりが深く、葬儀で念仏を称え、お盆やお彼岸には亡き家族を弔い、死者のためにひたすら供養をしてきました。「先祖」とは、血縁を表すのが一般的ですが、私たちの身の回りや暮らしを支える社会には、名も知らない無数の人たちが、つまり「先祖」というよ

り「祖先」が遺してくれたものに溢れています。血縁に閉じない「祖先」の言葉を受け取って今に生きるかが問われています。

Well-beingという発想

今、私は“産業医”ならぬ“産業僧”の取り組みを通じて、企業で働く人に向けて、僧侶としてできることを探求しています。企業組織体をひとつの生命体としてとらえ、集団としての「ウェルビーイング (Well-being/幸福感や充実感)」を整える試みです。

僧侶と社員による1対1の対話の音声データをAIで分析し、音

声感情解析によるアルゴリズムの力を借りて、状態を捉えます。もちろん仏教の知恵から学ぶものはありますが、現代の文脈に翻訳する上で、サイエンスの関与は欠かせず、仏教×データサイエンスで企業を支援しています。

終身雇用や年功序列制度が壊れつつある中で、雇用をめぐる人々の不安は膨らんでいて、現状の所属先や、手にしている立場や肩書に縛られている人が少なくありません。この仕事、このチームに属し

ているメンバーから外れてしまったら、自分の人生は終わりだという意識に取りつかれると、それにしがみつこうという執着も生まれます。

特に社会的ポジションの高い人ほど苦しみ陥りやすいように感じます。人間は、こうあって欲しいという思いと、思い通りにはならない現実の格差を前にして、感情のバランスが崩れます。そこで産業僧は、他にも選択肢はたくさんあるよと執着から離れるヒントを与えます。

今日を生きる私たちにとってひとつ重要なことは、仏教はブッダになる教であり、誰もがその道の上にあるということです。ブッダは目覚めた人という意味ですが、これは、執着から離れることを意



かつて修行をした神谷町光明寺にて。

味します。あらゆる執着から自由になることを成仏と言います。一切の執着をせず、完璧な状態が成仏ですが、人間ゆえ、そうはなれずに誰しもが苦しむのです。

大乘仏教は「一緒に救われていく思想」を大事にしています。いろんな人と協働しながら自由になるというウェルビーイングの発想のもと、これからもお坊さんと一緒に考えるパートナーでありたいと思っています。

Profile

2003年東京大学文学部哲学科卒。インド商科大学院でMBAを取得。寺をもたないひじりの僧侶としてnoteマガジン「方丈庵」を拠点に活動。ポッドキャスト「テンプルモーニングラジオ」の配信や、お寺の朝掃除の会「Temple Morning」など仏教界において新たな活動に注目が集まっている。